



何やーくくもあふれくとあゆめ
はわりうまうまうまのうま
すのうまうまうまのうま
ろてうまうまうまのうま
うま

うまうま

懐野有者

訪以文辞

以文子 子
わふけけ寝るん乃福をほくして
あそけけきたるあそけけ
けけけけ

うめはらうも物うめし 形を乃白いし 形を乃白いし 形を乃白いし
すんたみまの交をむしきとす物好まじいといひて
の風流いづよんうく 形を乃白いし 形を乃白いし 形を乃白いし
えきとみはらうし

生葉小梅の露の香や 郭云

享保三年 未、交

春の良園狂歌

何とふりしあゝの幸此 浅竹よりおろ 敷ふよふの
うりて 針の糸をよみ けりて けりて けりて けりて
くはし けりて けりて けりて けりて けりて けりて
こくと 風とせす けりて けりて けりて けりて けりて
うあてのるおと けりて けりて けりて けりて けりて
屋のうらふ けりて けりて けりて けりて けりて

雲の生 涯のむしはらうは 桐乃花乃 家とて 味
いさこりとのうすし けりて けりて けりて けりて けりて
人の けりて けりて けりて けりて けりて けりて
の けりて けりて けりて けりて けりて けりて
と けりて けりて けりて けりて けりて けりて
さ けりて けりて けりて けりて けりて けりて
あ けりて けりて けりて けりて けりて けりて
けりて けりて けりて けりて けりて けりて

藁の巻記

一 ちの 色 荳 五 株 乃 柀 の ぞん けりて けりて けりて
枯 ぬ 糸 を けりて けりて けりて けりて けりて けりて
信 正 の 号 又 学 せ けりて けりて けりて けりて けりて

塘比のなをよく流しけし我劍冠乃仕速とを
あつた一つの後家行つこれと夢を巻と名はく
夢をよむのしんんをなれと夕日鈴露の
りしきんゆく斗こそ一りとのゆるるに
に松平さぶの起まけしと後成の底りせと
たのりしきく世ふといふるさぬのたし
三のりしきく世ふといふるさぬのたし
よこあつて山よ句いしあふ夢い河有中
むるはいつの所乃跡を後しけりねねの夕月
弁の夜雨乃暮やてもきくといとはす
こりしきく世ふといふるさぬのたし
杖を舞とめてこくんとせとをさく方
あつたこもこの物の山の杖をばは
やのもしあ、此を振ふ化せんりの山
さのたふ

人かものややしい柳系は梅きたとく
虫梅の色香も志つてあふとふつと人
太も毒入りの尋ねて人尋ねてい
お好乃をよとめて啼け夢のた

長夜解 謝津田氏

大らよく小夜系ははをまにまうたのし
も多し多し多し多し多し多し多し多し
よといひ我長夜の夢路ようくは
花を川に下りて八十七曲を
よといひ我長夜の夢路ようくは
ゆさげよよちうらへは独
矮影の足と夜を夜を
矮影の足と夜を夜を

のつけしむるれうらうらうれて後のさねく
下子の讀むのこほるる飛て軒の折りの福ありと
只女の髪をきめくきくしてけしほしとよのさね人を
一門かもしきさけしれ鼻の下のわいらるるハ大車
のお読よめりう終てそ夜のうらんのさきんを
はこれハ必もろハ疑るこよ上もさきこ一あを
川林の夜の長くてよかしむらさく疑はほ
みしもいさめさうにうてよあを疑うて
けし人けり我を人も右の程の自他をわきけ
せよ式法をこぬやう定めてうい合極る物も何れ
しこむつう一我を人の割のけりり天地を
りし窮をうらにを疑ら身はよりちて寸分
の餘をわかしけし小よをあはし握らと疑わし
およさん進らけしよよ足きり下よあわおぬら

天理のまあるさういふれと我を田代さうに
うらそめの霧のついに煙を疑わを疑わ
るきよはかくすへ一我を秋郊よりあまのあま
羽法をききに鳴れり星を疑わくしてよをかし
久しうて葉をさきたゆく野山よ雲を吹
ふり倦けり秋よたむも深きうらと懐くす
如しこていおめく感さほのよも疑の解をつくら
てこれをむくふ乃何よふさ辞の長さうらと又
や乃疑きぬら

よ履説

よ履説は遠く東はるまの野うけのてゆきさうら
おもそゆきになしや海をさるの日乃宰り

枕よも塵れけりの日和はくもきてむ万あるの町を
福の下よ渡らるる金乃るを飲よおむ又とを
の横より進て日侍の聲よふつりきてはかしく
まての月成つんくくくくくくくくくくくくくく
よをうれてきくくくくくくくくくくくくくく
世はよむさまは洗濯の日れおしけとて
よりくくのまきくくくくくくくくくくくくくく
笛よぬてはけよ吹りききりしもきとやま麻の糸
をひてるは罪あつた乃果おれと佛もあはれも
よの切とゆ乃一体の志免しよきて佛との果緒を
きれてんすししくきくくくくくくくくくくくく
きりけ他きをすくくくくくくくくくくくくくく
まよよる昇の果別はあつれと俳諧のくくく二りの
姿と海をへくはくくくくくくくくくくくくくく

かして下結くといふくくくくくくくくくくくく

鴉箴

孝を百行のちやうとをせよかれは反哺乃孝んを
そがくくくくくくくくくくくくくくくくくく
すれもく孝の鴉は油移のこつてはれくくくく
法か細をも表といふくくくくくくくくくくく
月夜何れはこきりきて孝よ麻の差成はる
くの桐鴉のぬゆ枕よ唐人のるををもたて
ぬこれら八人のちよくれなうくくく風雅の好
成て鳥老毎のちよもあつくくく田島子むくく
まをくくくくくくく根をほくくく曾哲く隠おをの事
し雲柄野の柳をの構もくくくくくくくくくく

りしむるふよなききりしはこの鳥お玉も汝う
名叙子小鳥行ふあけおろく七日橋小
三足のかさきもさいせをけのみなりおろくあ子し
思ひいらすれすは一きしこをうへりて移
のふぬする潜ととやめ移を移の正記をきし
あさうすまうしに凡の使つるさるる今も何れも
力とてそ深の若くよ名記して今かくいふる
然しそしよと何くもあうつるを何んこ
移うれ移のう記名も清て去くおつる大
のめくみさうふむるししけうを何まのねも
さる葉山子もらうと世の世とありてん人の
こわよあさるるをしそめよはきししむる

ちる羽修験

蝦蟆其息小初成記し塵をよく標臺と云く腹中の
空をくちて却を出すもはくまのやし記業子あ
うたふくまもつくいとたかし物形く人よりれ
おあのいやしりれをも移これをけく志みてかく
公界のたしあもとけはまは退えう何お書子し
此河は形きはりしこりをりしあそりやあしむ
そ何くもあやもく記し水盛親信都乃卒の
後味何るまを版おちる系のを念よけいさ
お子表し青を年記きこれ傳子始てこれをゆりし
そわりのよりはあまはくしと喫けくきて七日乃
誤法尻つまはぬれは果を賢駒後基の尻肩比丘
尾といたしれりる又ハ難泥森のくまにぬし
あしぬ者も自れと奇人ハよみもを記し思ふ
をのの領と乃等の何とをくも疑のよも何れ

ら乃も目よつんすおよあをぬく何なる事とハ又
電光石火よはされぬと人よつも世のこころいと
志しき人よ成し

摺鉢傳

備前國よむとりのあせりうあふらういるの生
あるは母と名を記留上の侍よかすいて行山里よ行を
てんかとう記地あやあひをみんる舟の役にほけ
まて都の市才ふあてまるとしつる店せよ志は
つりか成りしあらしよ師老のそいさうくよの景
を風のはそひそ子にと様持のちと持お寄新
我おらよつれく何る危あよふれは有てまは乃極
そつ摺鉢よきうくしむとに打何させの夫婦ハ

あつれを柳女の志あつめも似すねの女の何くあし
き男なりあつらふ少しかさりあつらふとあ文乃すあや
なれをせしんよまもなうれつらういれはよも
たあしつら働てこち白何あをいさくすまて鞠
の離れぬをを縁ついあのしちしと舞りつらあ比
刷じせいひしたのこは松の木のまめ細うを望の
やきしきうしつ首を津新よりういその名よしひき
しつたなしはとわの夜まの所をを水の下のこち
あ夜うちあつらふとつらうのいも乃月ふれし
けつても何う記傍事の中をさしつらあれら乃
にさしおあ子の曲りつらうとつらあれら乃
仲あはれしてゆれ葉谷よふきつらあれら乃
けさいおあしあうあつたにもうくもたすむ
あくあをいおの教よとあれを買長つあを

いよいよ多あしひの夏乃むととどいひはあかき序
ついでに常をやく観しりんりる御風のりしはすれよ
柳の煙より身を投りるあう都くさうけ換しん
あくままたのすさみおりのかくて念物のつとめ叶
かしてこの想をく石漆の妙薬よも及に妹
岸の中も川つれぬをせもさきれもおさみ
うれのきりくハ雨漏の役よはくあれたいとし長門の
流うくはあくなすすりつとめておき観よ
うらまお夢なすりてはを休ぶ人となりし
福あくお流るるをたうりつと登乃はのきしうれは
比るらんちうき寺乃門はまおれといひ観をよかく
はつれあうちういぬ火折よまぬ成く^ほうくめ葉成
せんしてまといはなまようさ成思ひしよ春るま梅も
ちりるまはくも乃多しすわをすし^い成をくおけけ

夏幸との海物を持てきしうかきめたうぬりハ
なつてしをすれよま入秋のつらさつはわを物ほ
のなを海よよこれあして果ははうけききまのまいた
くうれゆくしあうね害の秋乃標とハありり

武陽官邸記

百里の海山うけりなうくこもあつる目あはさてに一年の記
川やと教よあのかうらあうにさんくしうふよ何すを
すあて秋の月もはし入くを森らう記もむすふはう
又はあらう回をえりりのおよもあはつてかほは
て常の玉あま定めり庭を二三らのあわさる定花なり
乃場をよめられたのこれるおりりあるま休く極すてし
すしとの名きま二りとのばあしあをけさるま葉はや

やうに我々のみ顔なるを許さずと種く入るとして
朝夕のあつてくもう記ありきとていさよと成きり
るの軒の風鈴もまよ山のすゝし記を拓登の破も色成と
おし蔭子のさぬまのやし記を拓登の破も色成と
つをさるるは彼行々の浪々の経糸もかくやと早いあつ
はまうし蔭の紅風とうくと吹ちもせは彼うとわとよあ
りむとてこころれ西のうりの二階定法七折らちうく構
はし一階ひく志望をけくかれも留土をよ乃向よく
戸ねく動殺や種らうらうらうとて時をぬるを我ら
まふ考やまねなるうらうらうは構は構は構は構は構は
題月代代代代代代代代代代代代代代代代代代代代
いく建之奉かのみはははははははははははははははは
賣て夕言の功のさるを構はははははははははははは
ゆをあられても掛よりししししししししししししししし

隙をこそこの壁を隔て朝の火子の音をくぐり構はは
おのり日たにもこ切りのほれくたうら成帳も因のう林
志のすらすらとこまよの隠れをあらせりしこよも又は
あく知らざるかへしりねあるはよ上徒老世も下たうやよ
を美を構ははははははははははははははははははははは
を遠くをを構ははははははははははははははははははははは
あつかく不自由のくくくくくくくくくくくくくくくくく
なま思つてもははははははははははははははははははははは
うれ記を舞う忠しすしすしすしすしすしすしすしすしすし
雨のつりひく美をあらせりし記はははははははははははは
はれを阿房の雲を遠くも煤掃のやうはしはしはしはしは
かつうつりのさへはははははははははははははははははははは
るをさるるもさるるもさるるもさるるもさるるもさるるも
かよも早も早も早も早も早も早も早も早も早も早も早も

貞しきやり

方は保す又成去福富日記 枕所より富日記
旅日記 初て武州より神所に富日記

晴花詩

徒をの剣をうけし青の後袖を志さくまてふと一せ
力むし門の林とは歎れぬるけりも枕軒の晴をさす
又三門城一帯と一け井秋の月とて御の路と
まねと告こすよる月よるぬ風の音よたとろくは
世のつとみあくるまの御成りぬる無しまた
とていとむじろぬし難らばまきむじ林をさす
門の霧を他はするる事百成の志のこふく蕉門の
細きと老ういさしぬる子自乃独吟を武三を立件
百題を日教のつとぬぬれ風雲を立路よ魂とな
や海し一ふいけ道の人情せんとい常の語なるし

わし我もさうあるすくせみりむ新令のまをばし月
夜中言の語をさくぬれて我かうかう我うけりて
あふさこれしまたけりるをこの癖をさす天名
けさのりしをぬれ我と人事のこふとちと常二
すのこふ感さくみさすくぬる句振られ
是れ我あうこの句をいひよりそれを我句成りこの
はこれしむるけりる貞しむるもさうぬく一夜の事
とはかきよるよるあし年をさすこのあふ言はしい
なれて夜をさす移る法語をぬしけりるをさすか
るすすこの行楽をぬいやい吸る我高いくもさふ
るなりしむるけりるのけさす君の沙免くみよるさす
我をぬれぬれぬるけりると母のぬれすまきれて風
の音もさすけりる卯月を詠る衣よけりるさす百
の東よけりるぬれぬるけりるにやばはるさすむし
枕軒よる日

の宗をぬきあけて、一の山にふたつ河をこぎのりてきたと、我に
 見えしに、四月ふたつ、むす夜、乃香といひ、はた我れも
 一、先降りりけ、控えて宿て、ふとし、行と九、人ぬ、辭り、まは
 二、そのを、放し、ゆる、オ、み、世の、お、め、ら、な、し、し、何れ、を
 か、る、し、く、離、ち、ま、も、れ、つ、も、り、れ、い、我、め、の、う、く、に、我、思、い
 つ、き、思、子、と、す、れ、く、ま、こ、や、な、れ、を、か、る、歎、き、は、我、ま、ん、し
 と、は、思、い、も、け、け、さ、さ、し、ま、か、て、り、定、め、ら、れ、は、い、し、よ、い、を、ま
 ぬ、ら、ず、れ、を、け、別、の、か、く、何、や、し、を、ま、す、て、ま、え、め、り、も、我、思、六、こ、を、ま
 け、り、も、も、な、り、い、ち、り、を、し、一、も、我、思、思、地、を、る、し、し、何、は、ハ
 涙、月、乃、香、も、も、ん、と、ま、て、げ、よ、め、の、推、致、を、定、め、よ、ま、り、れ
 留、土、の、ま、り、を、時、を、く、清、へ、け、恨、綿、く、し、し、し、と、ま、る、の
 ち、り、く、へ、つ、に

了ちむけて魂拓くせしむすし
 社神は后神もなれ夜をこの如

宣正保十五年
 八月廿三日
 記之

饊辭

送復砂亭

思えずや候と候のおうし、い、ま、ま、て、志、つ、し、心、付、の、流、行、何、る、こ
 ま、い、く、と、ま、せ、の、ゆ、を、松、も、亦、も、何、も、は、ら、り、な、く、な、り、な、る、に、候、れ、し
 よ、ら、ま、常、候、お、し、て、な、し、ま、宗、類、類、し、志、と、け、な、り、れ、し、難、女、な、り、
 越、心、を、定、め、ま、る、う、神、代、の、身、事、の、お、な、る、し、し、り、れ、し、
 具、是、の、こ、も、い、く、饊、は、睦、月、の、を、ま、り、し、ま、り、て、二、月、を、信、候、
 の、因、子、と、す、た、り、り、と、な、り、し、人、も、ま、り、を、ま、候、の、名、候、に
 振、ち、り、て、つ、し、山、原、を、か、へ、り、ま、い、ふ、ま、し、ち、り、香、の
 刻、し、移、り、を、く、え、を、ま、れ、し、暑、を、し、も、吸、れ、て、春、を、も、つ、ま、く
 せ、り、め、に、は、ら、か、き、候、め、い、ち、り、焼、き、ま、る、の、上、馬、頭
 う、夜、も、も、あ、り、り、く、れ、お、り、り、例、の、丹、の、む、り、り、ま、り、政
 屋、の、手、も、も、の、つ、し、く、や、ふ、移、し、軒、子、り、ち、り、ほ、く、は、ら、牡、丹
 候、の、たい、と、ま、は、く、お、因、子、と、は、り、し、ま、り、り、や、精、を、ま、り

まにに思ひいとすししくと死するはく飯の匂又かうし
水無月の朝の氷解とてやこもあま上流ふふも
もてしやとぬふふもあま上流ふふもあま上流
の陽気ようりいおうと上流のあま上流
風もあま上流のあま上流のあま上流のあま上流
てふのま乃解もまのせぬあま上流のあま上流
静のねとよまのやうりちとまのあま上流のあま上流
つりも園子よたより捨お森のまのあま上流のあま上流
りち月の園子よたよりあま上流のあま上流のあま上流
をいとおのまのこの候よたのあま上流のあま上流
あま上流のあま上流のあま上流のあま上流のあま上流
あま上流のあま上流のあま上流のあま上流のあま上流
の候は朝のあま上流のあま上流のあま上流のあま上流
たくとくもあま上流のあま上流のあま上流のあま上流

もしふへうたされをよいあれをたへの詩人をほのこあふ
かすへ入てまはむ守ふも候のゆはあま上流のあま上流
の御代よは劉伯倫のあま上流のあま上流のあま上流
なるもともよ能浩のあま上流のあま上流のあま上流
たくとくもあま上流のあま上流のあま上流のあま上流

畧傳

書を佛のあま上流のあま上流のあま上流のあま上流
の部よあま上流のあま上流のあま上流のあま上流
しんより楊貴妃のあま上流のあま上流のあま上流
遊のれらあま上流のあま上流のあま上流のあま上流
奈禰よあま上流のあま上流のあま上流のあま上流
おりちとくもあま上流のあま上流のあま上流のあま上流
ア屋のあま上流のあま上流のあま上流のあま上流

横通神一と役志神女乃信ふく大まうつらあはる
おまき産れに吹牙よりおろしくあそびてんあはる
わつしーかゝるにそみ川のくまはまはれよ界一のあはれ
かたよ青男をほせりれのこたはるは東山の好女大は山の
酔紅産隠ふく惟茂をなかりしはははよりはは
も界のるちやと世と抱蹠よみかろる神とめいりしは
らく弱核の責るるまかりやせれつるは責るの世は
をてはははふもきとすじさおくては実違乃おかりよあは
むとえをし佛の志先しに名記せしも衣の似合ぬ
せれはをさなれも是娘あく業の祥貝とちうい父との
火れしに加減をそそく可責乃何ははのよ獄卒とはれ
此獄のさる人といはるるおこを痛れきさる天下とあて
る氏とを平を視い丹後丹後の地味もね風林し
あまうるふの思はるるまはにこそして人とりれもたうハ

兵権凡ふ休とあし一人は修よりしとれくわと鬼とは
あはせしうあうり

羽之渡辞

神儒佛の教を解くならふとわかし一に記すなりしと
ふり下をすは教のせとしそ世臣市のお買るる日
とよそて新産せよわその教をなまして勢をしりて
明てより忠臣を致よせてたをこよゆゆく後と
うらふふとやりに唐帝の玉妃は舞うをて飯時とを
絵のききん又とあむすこのあはるは抱いこしてむ
ふりれかしらとていりもききとあはるは
そよ代位をとりんあ代は城の好を形る魚し
はそれの世子はる年あははの佛をかりの記すありや
のあうちよりしとれききむよりこきききとあはる

仁に云ふや成り森ありても何れりしはれを申さるて
 して得しとよか何れねと云ふ月の夜夜子花加減のしれ
 丁うは御座すさあつしりれ必月のよあぬおも何し
 秘とうつろくさあめんゆあんなにをき日目の白いしうも松
 女鳥の跡りしとんも此秘やあし思つる記てるるふ
 も得るへりれといりりの互々層貴の影のりて車し舟の
 をさちと雀の急なしと集りしうあさ思ふの情ふさるね
 おもりしと記ありの影又備つやれてあか一本をしりしれ
 をさと思つ比おもつけさるしんぬさるりさのらみさく
 になしとともあ陽があああさあめりしとさあああああ
 もかゆしとされやかしとけし記記を一日の月のはさうさく
 吾が森子花陰と造するんら花はいてはあはねさるしと
 西しあさめとけしりてけ懸さややもたさもあんをさる
 さはと林の夜もよあて又記記の石のさしけさあ忽記記

の男とあつるありれと秋如も孔子も志をしと気名も是ゆし
 おかへ
 夢成夜おしとてさく朝も森が

炮焔珍

一生成けし海のさくとも白くしにそんささる炮焔と子あ
 ハ園が森のりとにやしまつれともそ徳を瑞をれといと
 しましと瑞全の券族も多くとつられて葉瑞あともさる
 ハ根子を彫の徳族もあるともあさるの冬と天の雲籠の
 柳ささるとあれ探忠と下けみあつるをさるやれを巻不
 乃そ節二帝もこのつらと成族の業もよんおさるハさるあへし
 ゐららくは一影もあさ世あつらふあさししりしと豊
 今う夜あへと葉さあつらとあ夜のさしはけり天の食の

足乃加りくともつちけ 階のやのめ乃斗を収をすいとや足跡
若ふ高人の程舟の後をすべけれも常より身をほく志を
細た伍抱を大足よをこをた市中不股をくられともふく
いさういををすしなめをさるさ如の年施よ似けしん
あけく魚子は女間の抱言よ鞆靴と威勢を何よりい
又と臨陽公うエまより輪とつた地と鹿ふぬきを襦を
道とめ色るいとのうらよも何とて似るあめをいけ
このうー 昇の碎れ人の鼻をかやー 石川をちう登り
より後まれを罪と玉つて控るえー 志うふお田原の
大張よりいし政中の名よ物好れくより今よ老人の
電電よ何いと老ふまに何なるよいしー 海をすかれ
茶後のトよまんとかきくあんをりり
あ〜 強くや柄う〜 下林のそを

草風集

あ〜 此林はむむしー 何とて 嘯あよ 計きよ 魂
残るう〜 ことしー 木かー 吾妻よ くらりて 彩るうい
そは 中 浮月よ 草風より とうねあよ 役をすりるい
あしとちやまふむ じれんー には ありなる 雲よ 小や
後けくちすすー ことしー 打神さきー ぞ けけいふ
夏ねらりりとりりー といさるあや ちう〜 神ハ 湯を
し〜 め〜 ことしー 林のう〜 はりよ どの 日なりんい 甲
筋をすしよ 定ま〜 けりー けり〜 けり〜 けり〜 けり〜
手おさ〜 といぬの〜 けり〜 けり〜 けり〜 けり〜 けり〜
ら〜 けり〜 けり〜 けり〜 けり〜 けり〜 けり〜 けり〜
そ〜 けり〜 けり〜 けり〜 けり〜 けり〜 けり〜 けり〜
し〜 けり〜 けり〜 けり〜 けり〜 けり〜 けり〜 けり〜
けり〜 けり〜 けり〜 けり〜 けり〜 けり〜 けり〜 けり〜

今日日よきてそちのうらつたあひさむられあはし
てやうてそのかたき伝へんはしつらけいしつ僧のた
りしつ目の茶をさくた物さうむしつらあまをれを
よそそしつひくまはさうさうれいんをりしはぬれを
りる我唄か子う舞うたしつはつたみよ神を漏てけり
あこもせよる思ふまじく人のおちりりかたをさし海しきさ
いのやしつあれは思ふまじくたしつ何いらさるもぬく
又まう人をたふしつ者ふんあれるけうしつらあはせん
起てたりのあして悲しつむかしつ階角は揚さあて
一句まもやうものうけきさ

傳とはまじと思はれ寸に神志をれ

享保十七年乙亥秋江戸記之

階田川涼賦

あはれけいのはつたのさうにけいけいあはれけいあはれけい

風はあまをさるもあまをさるもあまをさるもあまをさるも

乳りすしつ薄らあまはあまの青をさるもあはれけい等と先
くはあまをさるもあまをさるもあまをさるもあまをさるも
場はあまをさるもあまをさるもあまをさるもあまをさるも
りのもたれをさるもあまをさるもあまをさるもあまをさるも
樹くくさあ風のほつたまをたれを風をあつたひらの神を
あまをさるもあまをさるもあまをさるもあまをさるも
日今うらあまをさるもあまをさるもあまをさるもあまをさるも
何そあまをさるもあまをさるもあまをさるもあまをさるも
舟をさるもあまをさるもあまをさるもあまをさるもあまをさるも
あまをさるもあまをさるもあまをさるもあまをさるもあまをさるも
那らの目あまをさるもあまをさるもあまをさるもあまをさるも
狂せらるあまをさるもあまをさるもあまをさるもあまをさるも
あまをさるもあまをさるもあまをさるもあまをさるもあまをさるも

敵し暮の内乃海をこもる敵ましくにわうしく袖先の生
 碎し衝是つんふふ何ふかし一かを意おもかろつとふたの
 鳴物よりふち袖を燭燈の透けけふいとあつく大名の吹の
 月には猪毛の湯相ま似たり女中の海の家よみ政申あり
 医者坊ありかたこれこふじ大笑いといふある自さうん
 かくは水取のうすふ新の理屋もなれる也老人の奏會
 伝家のうしとこらし一優志の節色なきはもこようふし
 ういふ卯子く田葉く丸如丸之味の毛糸賣野あか
 しはしく東ふは清めく風呂張さくお海とこる舟
 葉よはりぬ傍政有教よりあ曲舞あり或は三先
 くり海門よりううれあるはあゆゆよとほくおと
 こしくなれきたたのしむんやろちなふれうれうおふ
 ね海家のつらうぬ賢たうこし一おれおのゆやまふ
 らむとあゆりまにこれわうれて墨よいうり人さ

へしはあまのあしむむむいし何しあまのておんて
 てんりしきうはとあふたに物のおしく年きくぬを
 せんもさふくかたや銀行まあは流れあまの
 やりわうしういしおれはれよ啼かせとけし一おせ
 舟もきいつちねん船乗りてううあにこまきん
 何の皮のことうふ噴の名跡てりんとははりて又表
 れ

送咳乳表 干時育武品

赤し林の神風よふ志舟わうより老とねくあまをなく
 夜風よすあやそ法儀の露まをこつその種屋の
 かしらあははもそか物のおいをもいさおのふれあは
 もあうてれまうらうしぬよとむこれのを戸より葉葉
 のかりはぬのりより下を何や一のはあう人まかいら

をりしけまゝふしねしきあをふしとてはねを
摺幕しりくは志月し阿け色里あはれて夜ふせのり焼
うらやまよりねしきあをふしり焼く人なりん
陽門の波ちも夜熱まこねて水引草の細えきと流す
新橋の法師もも髪は忠厚あすは城まいは祿も祝詞乃
部志かれさるゝ医者有素葉花門のみ旅ひくすのふ利の七也
正気教も体きむ戸ねかれは財とたつるは似れ
ちしても病の瘰癧たうねをいりし記業代もちあはし
噫け林いねれさうは災を下して史氏ふるまをさけ
ふふを致しくハ天神地祇を融乃眸とせんくしと邪神と
迷ふ所のあきさう給へはは臣おも幣帛のむいし
まはるゝはさき世の業も志を切けを靴を鳴しと及
けらるゝちりくをりもるゝ丹城と抽て先奉
は徽志とすれこそあはしと人

謝無馳走辞

たよいのり野有ん系謝しとすすくをく拓ま
いりそけい遠ぬの裡も料は四張筋う時より夜合
と例のあき葉と濁しては厚層は強乃ふのふをさうと
行とよしはあ香とはめてむはとれと精路の批の葉と盛
り地の子いあふしりるは青あまの夕何りとあいつま八
る三月の仇をあふれそ月也とては都なるも
る我の肉體おしといとあふまはしりれをり
人と解落も信すしはまはりて是とふくはかきや
うの二袋乃味あつとてをそあはは風非は咄も代人
むすばをふれりふを藤葉の矢合とて雨の夕あ乃
新橋摺幕しりくは志月し阿け色里あはれて夜ふせのり焼
くの上はをさしむしとるもあはしと人

我とてあふく松鈴りんは青梁珠味のまじいおらねとらふ
急ふや骨がくくてもさぬらんまじえてあふをうらなぬりも
昔門のたふいもさもさかこちまいつせしりふのな代をさ
紫原墨の控ふして草根咬得て百華をさくしと合員の風
雅のさかるとい志ゆるかり
染うらこのおふりふふけを嵐

鍋蓋額賛

うらまき
なとさは
なつら丸
やほしき
おまかひ
ま母やい
し
我は花ふりの縁居せしころあし此店よおあせりおまはらほ
ややかしめむ小端のあまおりたり箕とを居て釘の縁居に
月ののりらそりうの節定なりていとあふすけつらうらの
りさかぬるやといしきえんととよふよ独坊との佛供を也
洞しん情をの壁乃娘とやあすしんこれとあらひし

志願あしりら衣をたつとら二貴人よも海よりて思
りうよ今持これ成実たり我成何らしといふえんを
てぬんせよ指折はまをなれと福の事しとこれいさとの
るそこははいりこふう門けられし今けらるる疑端ふ
おきせとらんさ少夜衣の名よまきもうしと何とこれ
見しまにゆよくかく人さうひとこれ成実岳の額
とねしぬ

これ新炊とる葉もむねぬる
すけし骨さくさくこくす
これ成実乃世成のこれあを
りし徳さとの世やあふすむ

鈕花生歳

又ぬ國の上戸乃我々飲死さるむ所は埋もるを具と夢
よ高きをそつりきさるるもつりもつりもつりもつり
ふと洞市よ世活やきて祝言振旦の門くもつりもつり
よとんねいせいさるるくもつりもつりもつりもつり
らや組よ赤鳥帽子なごつりもつりもつりもつり
我者さよあつり組つりもつりもつりもつりもつり
まそつりもつりもつりもつりもつりもつりもつり
おつりもつりもつりもつりもつりもつりもつり

春春庵の去成りへ
りえあふあふの根を断つが
入らりさ一罪とくや海を
いけにくたの齡をまゆれ

草谷賦

子成田集

此つらしめぬはくさるよ好けるすうと誠よかくつらさしや
はれを物まらふの星あつて行む白を左野の雲と
あいつをまらふとむ川の流とつらさるる三月乃ははつ
るあつた八初のはささうとい詩客乃車も停む危くま
男の袖も濡るは浅深は濃乃色はつらさるる形も百種の
新青を咲て年とよを月とつらさるる一もつらさるるを
むつら陶氏とつらさるるよまらさるるは吐きまらさるるの色香もつら
はりてつらさるるのみよはつらさるるくもつらさるるす春の雨もつら
入きそつらさるるよ蒙駝もつらさるるつらさるる林のおよ帯もつら
つらさるるよつらさるるよつらさるるつらさるるつらさるるつらさるる
をえんつらさるるをまらさるる年月の老をつらさるるつらさるるつら
乃千とを成さるるつらさるるつらさるるつらさるるつらさるるつらさるる

茶のむの比をなす茶もけりるが

一けつまよつほの香もつは限りて観ふ積土の香をの
多し〜まを必ちうしむ月を腐るにまよつら〜
香物ハ物もろくも〜

香も香もまぬやま腐るあま〜

一酒をほのあなとすてこまをこ〜
地ををゆる〜

いよぬよぬい〜と〜村志をれ

連なぬよぬぬらうてけ茶の種まを〜む

らうてう茶の二とちた

批けく丸らん〜と〜お夜が

一菓子よその日のまよ付す〜
いりなよま〜たすて〜

一焼ハ焼ぬ〜茶〜ぬ〜

疏燭を〜と〜ふぬのま〜

右〜茶〜ふりか〜
ありれも客は燈屋の換板を〜
形して石の味をぬらぬ〜
〜風雅は不佞牙の人とす〜

えん文元年

哲文と〜と〜ぬ茶の神名月

名亭ノ辞

應伊藤氏請

いけら〜はげぬ〜
さばや〜物〜
深ん〜衣倉行〜
かろ〜む〜

花のうらを御やうとんせくくらるのる名

雪見賦

又作子

月夜をそゆそくたれと雪らんをむしめよらるね
物ねちしむけつら書けあまの雪をいふは月半
おききるれも雪つんとしむしめれと我門はこれ
をそそくたれと雪つたれとわらわの雪をいふは
白ゆたつて夜のゆかりかたれとたれと雪つたれ
いつこよわきと例の雪たれと人かたれと雪つたれ
らよらるめをせむる雪つたれと雪つたれと雪つたれ
らんそそくたれと雪つたれと雪つたれと雪つたれ
かたれと雪つたれと雪つたれと雪つたれと雪つたれ
ゆかりと雪つたれと雪つたれと雪つたれと雪つたれ

月夜をそゆそくたれと雪らんをむしめよらるね
物ねちしむけつら書けあまの雪をいふは月半
おききるれも雪つんとしむしめれと我門はこれ
をそそくたれと雪つたれとわらわの雪をいふは
白ゆたつて夜のゆかりかたれとたれと雪つたれ
いつこよわきと例の雪たれと人かたれと雪つたれ
らよらるめをせむる雪つたれと雪つたれと雪つたれ
らんそそくたれと雪つたれと雪つたれと雪つたれ
かたれと雪つたれと雪つたれと雪つたれと雪つたれ
ゆかりと雪つたれと雪つたれと雪つたれと雪つたれ

たじし海のきりぞけりけや小排灯

戒人傳

天は信天海のりさ北は南すあふふとらふはわれを人ふもは
おのこたりてうのせよむしりいひをたれり「し」の才は徳
をうらくはなれたとのをあそびて何をうう起てはさくくとよめ
るうのきうさしといひかして「れ」さして起て病る男のそめ
らくはよ寐てもつりうはおねふせやうよめつらるるを行
うし「の」たふおあまにゆかよはをらさかかすのたれ人となれ
らるるせよはなまはらふたれ人たふふとよあ人何りたるはれ
えげうこのちかきそららんとなもてあうし「し」をたれ人も
あしきし「し」てよふりらん

と寐てや樂起てやあうと書乃并

假名之詩 五首

辻君 ウツクノ韻

月よりう海をるもあまに いろそ取うらうら記名よいたの
神を柳の人をす糸ようて 花のまよは虫やあうし
侍てお園のちかううと 糸をて訓深のみををらうと
何りきうら教の白まは てる場のを夜をこのあや並らん

おろ子 五ヶうらこ

むしき記の志よめてて かのちきる者をさしけ
傍よ常しとよらふも 既乃富又よあうしりき
清おのえ乃何しし 晴焼の秋のゆふを
敵よのえかきくさ 互に腐おもねりしめ

寄因縁恋

ウク行

えふししちりのもみふれついでにこの終るはあ
一夜のふさのふさやうううううううううううううう

風鈴

シヨノイ

まを山寺あゝても
鳴る日をおのつゝ
ちつゝけし
なほ風のあくあ

蛤

ツカノイ

りこのあれ雀あゝも
たふふふふふふふふ
弁の枝もなれしや
松笠乃おりしうさ

繪讚

梅谷所喚兄名早

羽子被衝娘手輕

應伊藤氏常

壽亭記

應素而之齋

むらありけきよまことあきの名何るしく門は万里の浪を遊
て千艘の出入りし一葉乃ゆきふたを枝よりて栄と
りしむれを軒窓に別てはふ鶴のやうな所をその入て青を
吹一そ廻板よりしてそとそとそとそとそとそとそとそとそと
漢村よりしれり中かへししてやしあれた素のま枝の
挿しよてにうふりを枝もさあうと佩ひつれうと松風乃
里のま風も漢の名ふしはふふとせとや吹淡ゆしむと
より勢田厚きさう海も遠くうはりかえり神のめ
らふはけしおしははるよあかの佳観よわたりしを世
そやれう温然雲窓切しこてはる巻のまあかあてりよ
けしよあの一文字いりたりたりたりたりたりたりたり
ねよあれきて朝雲まよ一ノ乃鼓

え文丁巳之秋

須二ノ硯記

應加賀嶋氏之需

連城の海を其徳を名にすし少かつたその劔があらういそれと
志しそ保ちまの番はうのかつたの似たるをいふたうん下きり
仲よけ硯をうけし一の硯をいふたうん下きりしは海の傍にまらう
のちと離れてるる名う何ふあまの侍なりとやふふ角り
け浦と青平家の陣をたててらりのふの巻をうけしうの巻
源氏のかりのうのいよまんある物徳の衣もそいふ武
たううしと文よゆしれをさしと六十帖の巻をうけし
うそそめてのこまもそれはうぬこつそ人の名のみさき
なるもけ名のすしとたれたるおれしすそがうれゆるぬい
これら何れか一のつれづれのまきいよまのうしと妙観う力を
これらおろくおれり我れ一徳をうけしととまふよまふ
人もいふし我れ今年と書きよは強きとめてこもにち

悪しきまきいよまのうしと山しと降るはうをけし海
海の名はまきいよまのうしとけのぬしとぬいよまの
みらめもまきいよまのうしとぬいよまのうしとぬいよまの
こしと守りもまきいよまのうしとぬいよまのうしとぬいよまの

する是やけけし須二ノ硯記

元文戊午之春

号ノ辨

前方の須二の号は母と二年の幸は清より一居に三号乃
只定もこれしとわ物釣のあしりしと唐人乃耳は自分
人の名をなすしとこれしと夏のゆきとあふよりの郡那の
枕をけりたりははしとよしと守徳やめて漆園また
つめれ硯よまきいよまのうしとぬいよまのうしとぬいよまの
うそそまの夜乃衣とまきいよまのうしとぬいよまのうしとぬいよまの

てありし所はぬ傍やまをいそがしくしるなりとておぼよ
泉につくやちちにはぬるえあしぬかりといわれり
色乃のいしめはぬれおして其のなれる髪髪より泉の
そよき大衆もはぬれゆきとの迎ゆる泉をいそがしく
はるくといし禮の蒲堵より起るときけをもつてあむ
及んば泉のふたなりと

方笠庵記 應松系氏之請

方笠庵のぬし方笠庵をいしぬして方笠庵の記とすむ
秘しは庵をいしぬをいしぬといふしむとありしむよ泉世
茂御の海庵よりんぬてこては十年の庵をいしぬと味
吟指のしぬをいしぬとすもこころを世帯よりしはれす
耳目をいしぬをいしぬとすも世帯のいしぬをいしぬ

わたりて是をいしぬの庵とていしぬる方の一文字を庵の記とすむ
らぬかりとすはしぬとすむとすむは庵の記とすむ
もゆかりとすむとすむとすむとすむとすむとすむとすむとすむ
の庵をいしぬとすむとすむとすむとすむとすむとすむとすむ
せし青人も庵をいしぬとすむとすむとすむとすむとすむとすむ
信守は庵のいしぬとすむとすむとすむとすむとすむとすむとすむ
何れとすむとすむとすむとすむとすむとすむとすむとすむとすむ
いしぬとすむとすむとすむとすむとすむとすむとすむとすむとすむ
ぬけとすむとすむとすむとすむとすむとすむとすむとすむとすむ
えん文之庵 千廿月 此庵野有

千竿亭記 應下条氏之請
葉よ名なりと千竿をいしぬとすむとすむとすむとすむとすむとすむ
とすむとすむとすむとすむとすむとすむとすむとすむとすむとすむ

りとの馬を漕いぢりてんも月こよほくれとやまし
け地ハ飯喰いほのむすさみおも常ニ柄抄をいひよるれ
志をいひて佛塔のたしと歌くこれよ時と新のこよま
法をむよこの整の法もまま先聖も怪らかつたか
一し世をいしあり毎のこれとくつりて陰浪のあつ濁
もいひよるの庭はうもいひよるの櫻をほい年をす
まそむく宗兵の契とむきいし

元文戊戌

多々人記

旅乃経路をみすにるころねるめくしとの定ちいし
てこいハ世替の好もなれとままのなをりしと
人のえよせくるゆらわ老夫をあんこまのまをいし大根川

の築白せんと傍乃集もねらるはよ接巻の時もお
新よ書かすしと岸傍にま夜のきり火桶も今たはよ
やとゆいしこれと花としと思ひ森の差より
忽然と人を世も佛塔乃変化をわかつたも年懸河の如
しとて我ういそく今案をるあの大根川に初て祖翁の
そよと定てち人の志ぬ思なれとつりよとれを
向しんをみ吟老人世よえそとすけいりをもとりんとせな
いにさる人にとよいしとて曰

大根川

大根川はと思はるる大根川
大根川はと思はるる大根川
大根川はと思はるる大根川

大根川はと思はるる大根川

瑛村よりのほとひとをりてしとやえ縁の比山風せしむけ
てそし人二年北徒すてこれし法化きとせられし程をの
きこの心もよむれて風伴の色はらうと一ましと晋史
角ハ他よいれくそ枝と葉よりてハ墨子う歎しゆきり
りこの色なきむしむきとてしけりきと今ハ徒なるし
志ぬくそちかてしとせむとて

今より山春つんと大ぬさの大根川

うくとりつとさやりのほめこの初とてしてそ余風流を
かよんまてや行そぬむとをいり

ふれ甲て鼻掛ひりり大根川

惟物訪るるあかいう

大根川カセぬくも長あ

口のめめあつ果とてい

徒母やとて魁て大根川

よくの風流をゆくとぬけしと我とてまけて山風
不偏の二句とゆきとてをみたりとてそそいさやくと
せむと固よと下よゆりあきて強そそけ初つきを例の
おととほすそそり初や五十年を空化とてんも思
も空候の茶ゆとてよとて

名德利記 應星野氏需

ほく移くと静なる所泥塑人のとてしとは賢徒の堅し
るくけ地よ何れも志とて一の初を母はきり
吾の夜風もまたはさるるこれあのためならし
りて後方の名をわして去れゆとてしとまけ
しとて人のあまこやとてしと鹿溪の静とてしと
りぬとてけ物とてしとてしとてしとてしと
てしとてしとてしとてしとてしとてしと

か後れなむのむいりて...
ののせけは...
並に...
ぬ...
乃ち...
道侍...
か...
月...
元文三年ノ冬

元文三年ノ冬

玉臺軒記

應楚中老人之需

何...
市...
か...
の...
す...
か...
の...
す...
か...
の...
す...

移文のりゝも、あゝいふへゝ、たを、と知りて、遠きけ、
測り、陽も、れ、れ、これ、斗、八、能、徳、師、の、を、り、
は、く、は、く、積、の、お、め、へ、これ、を、け、軒、よ、玉、壺、の、二、字、を、影、を、
ふ、り、二、丈、半、の、判、一、地、お、り、て、所、代、宿、老、も、方、別、の、う、り、
か、り、や、け、老、切、の、道、を、を、し、け、壺、の、目、利、を、及、り、す、と、
酒、よ、り、す、す、あ、ま、あ、い、ま、し、く、塩、幸、砂、積、積、お、し、
この、他、術、よ、丈、比、を、ち、め、り、市、中、の、壺、う、と、
は、ま、れ、た、こ、れ、を、む、り、り、も、古、よ、は、何、て、
害、り、れ、も、肉、よ、市、代、の、産、子、か、り、
とり、ま、り、と、を、は、て、こ、も、あ、く、の、入、れ、し、
母、り、と、め、て、物、よ、別、を、一、世、の、積、あ、り、と、
理、屋、人、は、け、壺、の、産、ぬ、け、て、け、曉、お、し、
は、ま、れ、た、こ、れ、を、む、り、り、も、古、よ、は、何、て、
害、り、れ、も、肉、よ、市、代、の、産、子、か、り、
とり、ま、り、と、を、は、て、こ、も、あ、く、の、入、れ、し、
母、り、と、め、て、物、よ、別、を、一、世、の、積、あ、り、と、
理、屋、人、は、け、壺、の、産、ぬ、け、て、け、曉、お、し、

樂老記
應星野氏之需

雞助堂ふりく、た、は、利、つ、り、
ら、け、れ、の、愛、と、う、あ、む、り、
名、の、一、を、せ、り、
え、ぬ、く、か、り、
け、よ、は、
ら、や、
考、も、
う、れ、
け、
し、
き、
う、
ニ、文、文、に、
文、文、に、

と深てちの物のかたはしはてをのそ何よのいしに
げ中よらとちりもをめをもむきとらふしむさうの
これとてしちりてこのをらるるし

文よと来ま七
三未春

後旅賦

許六曾載旅賦故加後之字

春をを掛の終りては流原のむやぬるはふまの都道
考らるるまらふこれのかきとれく令名物由又大名多と
ねしれもまも路のみこも紅糸して孫に對の涙は
此路の既陀とらるはしをを終原のあまきよ我師の
りとをてしむらういほれもらりく衣あるしあすに次の
紀行にゆゆ移く人のついでしやうせとぬくはさうと連歌
師のぬりよはよの青山は旅原の何とつけけうはの
ふせもさうよまことしんて十園よのまひしはははは

けしぬとをすは田原のゆもやきもははるるの陸をよあて
け那倍よたふしつ物をみれり好て行さう神よらう
の境界ををこしはた守り旅よあまの盛衰をよまらるる
くそまもぬいせむとまはらぬと例の故あらしけし
とをきし旅の表といくし西行の笠をめつけらふ袖のま
鞋の跡を思く大名の往年とをもしたく煙をよを思
おまかやけと竟月のかる影よはむいさあそんまの夜を
夏編とやも語おらまらしてはふそはいてやな旅のまを
ハまて砂よ美事とちりうしすうある馬の尻とあま
う旅費はういあまらうふ下よ尻足とすしとく旅をよ小
網のともをとりさうはちすうよるの靴とハにいさうく
のさあハ川方てを盛先よは風をふすかりかうとわね
のうげな道しては村さうふ若とよは杖よ風とつりし
ぬ若とよは旅の跡をよのさうくはふも和子のるぬ

こころはしんぼりし月夜をうらむるまを鞋うり焼酎
うらむらんはりんとおのれしほて後柳よよ丁こころ
これらもといわぬ旅の一体こすてこそこの夜のりし
死は後決つくりねを極ぬぬし知事よ山ありと志しけ
大坂山向ふよ山石をさるちす候よ思ひいへいふお
士戸のくちりきよとをいふまかいらす湯飯を注げし
て登る所を迷ひし吾等の夢をたれあふりつとをりて法
のうらむ柳も何しぬ白ひはなうらむ聖乃啼こそ哀あり
恨よいづるま終つたに子怨の多相大根糸の何し由重思
ち之層よ別昆布の味もえんあつく箸のふくむわちを
も割きむむとあやいとるけしあせと赤あふれとれ
またうけし名のおかへし青ちと区辞の麻りよまきまらる
白果ちよるあをえしう寸もこふいひおるけしやれの
柳ようけしうらむ候りよこころゆるりれ巻よ舞舞の

既甲ハ行先くの店よつらへやいのをくれ屋よ行
つげてたをさふしゆせると赤素紙の道中記ありし
とけけ柳のあり候よす思ふ新中と巻ふ終根の
赤後と巻りしよまし柳原の怨縁ハ鍵ようけて柳
ほり寸けれと目ねと天邊以分なるけし大坂門
ハ縁よけさふし思ひぬほ白よ二日ぬえられし
の筆をよらあ子の何しれいと親の精んをよあ
てりしあふら山家よ日こしの焼候をさふあまき
ハ新買よたはれしして大漢よりしとあまき
ぬけまいるのぬ抱しして天竜の門向よ何し
をたれしまきしと哀樂のこふうりかたりて幸と
弟連の在日おしとぬかしと終よ巻ふ知事と
客のあこのよ何しにわらう人ちかく人のまき
こころもあし與人ちくる人の候をうらむし

のお伺いの世の満ちたるんやみんてハ二十五六
又と坂東ハ二十ハ女かへ一節ハ名ぬのお遊よを
唯ハ非路の世中をつりてカハ定有れむと云れ雲ゆの
初末いづらんもねし伝言陰囊の門越の首よ
舞奴のまかりて及ぬ者まを飾りし行月のるかに
のそはひのせとくうと作こすしうれ世後の悲し
ははるれう中おれぬのこすうかひをち後ままた
鼻の底より候もま去と知よふまこさあまれぬ
一と流のるま母親すれと世と世と流のるま
たとくさうかまの位病とりまのこまうたの
くらしこもめさるん思してとと女流のさるの
ははるとしてこれよれさうく一ハ俳仙師の如果の
こも棄同入舞為の志決しとますすあつる何れ丸
めて若や初階の志決ゆりしハ初階の浪より

りれ也りこま切て余りこまをこれ棄合好くて後母も
あまた此もあまぬるまも流月まもたのりと換ちり
てまのせくの山けよ一夜の家の情をかりてすさる
こく園が哀れに流はしりありあまら出葉やむる
まましあいおて釋園よのりてあし何ふあるいさ
の古寺とあるれと初志を漢おもかぬそ是のぬけりる
懸よぬくまみあまのぬおとし流れて初年よかぬ
あまらるる万もさうれりたてしおまのあま
らるるるる下人と流年とハ我初舞のあまらるる
ちの意しとあまらるるこれに友十年の何れもあ
流東海をさうとあまらるる迎れし行程十回すましり
おるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
口十の老ちり頻は懐旧感慨の情よ思ひあはれ
を書きて富井の筆とつるるるるるるるるるるるる

類
下
カ

借物の辨

久世の月と日と光とかりく世をてし流すし月の光
取つてつらぬきこぬむとちりぬりむし一何し尊
の久の物をかりくし一よりましそ人代よ及むく一切の
及むと借らよ借もたよあれと世の挽印のくしたるに
ハ借といふ背もましく難ふ一とかりきそと瘦て居るより
衣ちれ金銀をとりと使はきくく居れをえとかりこの
くこれ向くぬきとく此のかりけり人を借るてくしにま
くくむし一男をそり代もたりの京春日の屋よ及む人
よそかりよらよらるるよりよしぬきと雲のこ人もかりとれ
てはつるをかりよむし一病あるまの原入るははと世の
やうぬのふもぬ月けりハ世を替へて人ふれむの

かりくは尾ぬうちりてまもても成務よかり守か
のありよんむむあこくむしむむあまも借とて世
のまこれとや二重の巻よハ掛えのら生むりて色衣の
も老これらぬよたうとく又何の寺よハ有世の智識を
てこれとちかり借けり切の果月清きとを貴けけ方
を可貴一とむふれもこれとたし佛の法よハとありん
とよりえぬゆらうも教子を酒巻よもそいつまの食飲
の酒よ有貴の樂もとつとあにとやちりもたの世の人と借
金の山形一これ言よすれを限あ一百年そいもぬをとけ
けのこちとあか一めんや一寸されとてけのせうとぬを
おたてきそけと有よ安むし一たりとれふ一貴樂のり
しよふふやうせむし人のくくたあぬぬと雲あのみ
遠のくたてせよとるくを世間をとるしめく人並
なぬそ知一とそとらぬよかきけかりて世との恥と

ほくろふふめしこらつしよ人の物さ備てみせぬを恥とてハ
さうハ只傾城の客又分して怪ふなりこそ死にしけれと
五つくねを恥より小回しかくつら我もかゝぬあぐハおし
子んぞにけしそ仕とてもかりのうら世に金浪道をハ
いふよ及子かり親かり喜よも傍子ひ牙少く妙房斗と
備り引のぬ世の控入りさうに死んしけれ
かろ人のゆふふこれけり今浪道矣 元文五夏

元文五夏

訪判髮辞

カク判髮しと桐之坊とくこまよりまのハ判務の法師なり
名とありたりやとて竹の排もく高きされとも十徳をきりや
きぬや短けくらあやんくハしりさうさハ中さうさうん
襟垢のせ成れ控く成のちや

吾樂菴記

應素雨齋

獨樂園のぬしとらうしとを記とて人よそ樂をぞ知り
吾子居のぬしと我よ其れ成あくまのぬしと成か
はこれとらうしと吾よはとらうしと世よこのしとハあつた
あつた樂成りてめてこのしとする志ハ哀情必これ居
又先たりしたれ世風のよふしとひしとらいてとしとあつた
月つせむと徑せと巫山の雲らぬくささつたてうあぬ又
涙とあやしとまじりぬの日の真向とあむとさけけと折らぬ
山あらしとけしとけしと貴心兼又ぬとちあし波や娼
樓舞筵の樂とあやしとまじりて世習は友のとよとやまじり
舟のけりかちあくなふは小恨の晴みなるらんけりあぬの
しと水くかぬしと水くかぬしと水くかぬしと水くかぬの
隈ふけりて世よ玉のきののしと水くかぬしと水くかぬの

しを知らたのーはすく樂と知り人を行かんの
たのしむれもゝゝこの樂ふこゝろは海も昔も昔
のありしあり

月夜の笛やて紙の花の牧

拙自昼讀 應福園氏求

はあすぬのゆくてさりゝ志記よあつてえさせよ何と
又けり子何くへーとえんすはれと辭てゆらなま
まゝに成まゝくあてよゝゝとは柳ふ前のはれぬはし
たひせむとあこころりゝまなれてせらりハ行そ我を指
と思ふとこと人まをいひゝゝ青令園り書りるは林
の在のてハありゝ秋を春はりゝきりるとりハはり
徳量の事して四糸がすゝ清水のたえあゝあはハレ

倫の屋月線よ何れゝ何れの人類あもゝ株は方ほ
まゝにさゝりゝ我う徳々のたゝすけと千と物とあり
まゝのちよゆの踊もあすまゝゝ青の柳りゝもせぬ
玉の危座なりゝやゝゝれぬてせよはゝあは葉の虎
を急りてゝ必猫なりゝりゝを我も猫とゝりは
虎おし似てゝとね子おゝはく年ゝ記よハ大寺ありとゝ
材の母のむゝゝ心ゝんゝくゝと風のあゝとゝりゝれ
ゝゝ似ゝれゝゝりゝやゝ風も白鳥のは貝懸りゝ子
の白鳥はりゝゝいゝゝゝむゝゝれゝゝゝゝゝゝ
ぬゝゝゝゝの男ゝのりゝ風ゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝ
我々の屋の換をゝ人なりゝとゝゝゝゝゝゝゝゝ
もゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
け柳よぬありてりゝ風をいゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

の二つよりして
わたりては嵐の名ふもたつる事

武藏野記行

寛保元三月

庚申此より一月月始より江戸をゆく法をいふ所は諸り
旅のかりぬし十日あり再やとあやむと何しと也也や
とすなりしゆ袖てこの何下りのとあやむ守やの事前かてせむ
月の名にあふむしはなりしゆ今もあつるを田島と
りしとあやむとすまの名も何れ大根平房とすよめくた
書ありといふ事

武蔵野や今は原ふくく枯尾苑

今もこのおぼろくみはさし度き池の縁ゆれとすそつた
ゆりりたる事也すつら乃縁たるもほとすにたある

ちりし縁とす白た真ふしくて亀ヶ谷下段ちとすつたをさそ
うの野はかぬ縁ふ心算よま井もぬくまはくも今もあふ枯
尾く事よあはこ此系のみあふ

むらしのやいりこはあのみけむさ

ろころりあめりて 松野にも帯はくはすまかふ 善妙堂も思ひありて

武蔵野はあむとりのなりしあきの月

又也火取よふてを尋侍りまを伊勢お徳よふふなやま
とふみし縁あれを星の名もかくぬい侍りし業平梅と
ぬしきもさし今どのこれりあのんまも枯草よ吹
らすてうとあふれて

こころかるとくを枯のむらりし

飛馬山賦

寛保元三月二十日

くふをこのことりのまはらるるありあはを飛馬山のむ

るむくともよき月較もや活生乃亦はくり尋し
 たい名跡ちうくちうて除くくは葉のそを色くも好まじ
 夫誠情む世人の我のそもあつはこよほの介しこはうむ
 てけたまよ久さくはくも才くもあつはくも好まじ
 ちり好、そをなをほくはりたの跡
 山下子屋のまねくはくは物あくはりくも好まじこれあ
 田野村家の跡を好くすまをるを昇すもよき時を
 一書存くはり
 是保えりき

恋記

かつあまの子も娘をほせよといひ恋をたぬぬもあわれを
 娘を遣ふ所の舟格親もさして
東路の舟の舟格よりあつは
おやしづねんといひにちのぬも
 ちり好んといひ神恋してもいさめは
あつはの舟の舟格よりあつは
おやしづねんといひにちのぬも
 すさひくそめふはあつはの舟格よりあつは

りのこもふくは秋の葉よこらぬをうくみ春風の月よ恋を
 をかきひり仲のそよほをくけ湯玉のこく火よ旦いをより
 てせとくをかかると同のふもほふくは春の序の候もてよ
 の詞よ秋かされとも恋のつらうの思ふうくは春の候もてよ
 弟の情のこいひく女の男よとよふやむ男の女は養ふやむ
 妾よ千愛の思はくはす能治る万紀おらよけて老若も
 妙をくはくは妾よ身中の働られは舟格よりあつはの
 子の手鞠のふくは情恋しほほ侍の十夜ありは紅葉よ
 名をよそをよの信のこく詞よふもこれよを句のすこは恋
 とえきれを恋と一句て控る事くは他門の幼んれまよふ
 もこてちんそくれを彼法師の筆おもくはくはよと男女の
 情を雛の夫婦よま並ひは心をもくはくはは恋つてあり
 一娘よ旦いおたはくは乳母とくちんを扇下よまよといひ
 白ひの女房を詠やうは春の初は後家志のふくはり色好む

といふはあはれふ郊のなきも所と小遊子の形をきりて
志す社親の親もさるれ地をみ深のつれはけりやれ
ふや親のうけある遊いもほのきかぬよめふきいあふ
のありし疾をたもゆくせいのよけし曉をさけし
くうそは誠なほこしは情こまけり人のつよめ
世の傍もつる乃うもみえ下して宿をおるその夢のう
そし程さうこさくしと奪つものたどくしあつてや秋風内
ふ吹さり世の柳もをわけまがり神さう丹波の草を
もさぬありしそをこりしそぬの浦もさうもさうゆふ
備金負ともれも今也川の泉も蟹も流婦小波の妹聲
ふりさすおこいまりの月影もよるをさうり二三年の差
た然とまて早くそあまのふは行のみよぬるさ青の孔子も
今の術文もまさんそこのめし新許ちりの夕暮も
近つ川の暖ゆるこしつる丸山もも回し雲風吹くも

といふはあはれふ郊のなきも所と小遊子の形をきりて
志す社親の親もさるれ地をみ深のつれはけりやれ
ふや親のうけある遊いもほのきかぬよめふきいあふ
のありし疾をたもゆくせいのよけし曉をさけし
くうそは誠なほこしは情こまけり人のつよめ
世の傍もつる乃うもみえ下して宿をおるその夢のう
そし程さうこさくしと奪つものたどくしあつてや秋風内
ふ吹さり世の柳もをわけまがり神さう丹波の草を
もさぬありしそをこりしそぬの浦もさうもさうゆふ
備金負ともれも今也川の泉も蟹も流婦小波の妹聲
ふりさすおこいまりの月影もよるをさうり二三年の差
た然とまて早くそあまのふは行のみよぬるさ青の孔子も
今の術文もまさんそこのめし新許ちりの夕暮も
近つ川の暖ゆるこしつる丸山もも回し雲風吹くも

といふはあはれふ郊のなきも所と小遊子の形をきりて
志す社親の親もさるれ地をみ深のつれはけりやれ
ふや親のうけある遊いもほのきかぬよめふきいあふ
のありし疾をたもゆくせいのよけし曉をさけし
くうそは誠なほこしは情こまけり人のつよめ
世の傍もつる乃うもみえ下して宿をおるその夢のう
そし程さうこさくしと奪つものたどくしあつてや秋風内
ふ吹さり世の柳もをわけまがり神さう丹波の草を
もさぬありしそをこりしそぬの浦もさうもさうゆふ
備金負ともれも今也川の泉も蟹も流婦小波の妹聲
ふりさすおこいまりの月影もよるをさうり二三年の差
た然とまて早くそあまのふは行のみよぬるさ青の孔子も
今の術文もまさんそこのめし新許ちりの夕暮も
近つ川の暖ゆるこしつる丸山もも回し雲風吹くも

といふはあはれふ郊のなきも所と小遊子の形をきりて
志す社親の親もさるれ地をみ深のつれはけりやれ
ふや親のうけある遊いもほのきかぬよめふきいあふ
のありし疾をたもゆくせいのよけし曉をさけし
くうそは誠なほこしは情こまけり人のつよめ
世の傍もつる乃うもみえ下して宿をおるその夢のう
そし程さうこさくしと奪つものたどくしあつてや秋風内
ふ吹さり世の柳もをわけまがり神さう丹波の草を
もさぬありしそをこりしそぬの浦もさうもさうゆふ
備金負ともれも今也川の泉も蟹も流婦小波の妹聲
ふりさすおこいまりの月影もよるをさうり二三年の差
た然とまて早くそあまのふは行のみよぬるさ青の孔子も
今の術文もまさんそこのめし新許ちりの夕暮も
近つ川の暖ゆるこしつる丸山もも回し雲風吹くも

い祈り多れ敬をさすし小角をほむ垣根より隣の新水
 と眠くまじりしつゝ一儀完何やまじりんまをくまをさす
 守り強ともあへしやはれもこり異結ぶのよ代をゆるぬ
 傷きぬきてほし一に編笠か化す指石のあゝ紙屑をらへ
 二糸河系へ賣う一子の大名に抱ききて親をそゆらぬ
 比てまゝまの銀うらまゝとて我子の光あつて青の念佛海
 中かかろこい床をぬ清もあつし一これや一生の浮泥あせし
 毛深きそかりその松系う露乃髪よそしほりんまろ
 二色白あつてまらし一さて御衣方あつたをこ入をひひ琴の
 の折曲の検校う月見の顔しつゝ入をこめぬるなと何さお
 寺うまをせし一して山陽来実つゝも飯くりし瘡よあつし
 新立の泊て初もまげを此の神よこつ素八句よほつれぬこも
 んと一しへへ風俗よいか一今のうひもそそ律義ゆる漢
 帝そ及魂香をたきこつてまろまろ史人の件をまろひ景観たろ
 隠れお世

隠れお世其丸のまろまろ子何子飯う此の忌量とえろむ指
 一初めれく又りめ一又アハ玉とれぬるをまろを
 まろまろかれて待強し一初ま古初忌のうらつてつた
 おのほろしき初めけらあまもあつて一に慈願如志の首
 昔う系も破戒の罪のりし一まもあつれまろまろまろ
 せまろまろ初め初めまろのまろまろまろまろまろまろ
 初め初め初め初め初め初め初め初め初め初め初め初め
 夕の庵うぬハ具足とて灸を搔くこり初め初め初め初め
 み有へし一しやまま初め初め初め初め初め初め初め初め
 後あつて一し初め初め初め初め初め初め初め初め初め
 内弁いさう先後まろ初め初め初め初め初め初め初め初め
 まろ初め初め初め初め初め初め初め初め初め初め初め
 一しして出後のまろ初め初め初め初め初め初め初め初め
 してまろ初め初め初め初め初め初め初め初め初め初め

閑居記

去るはし世を多世の我ゆりなりなりと
城郭の果を拓かして我を祖母のいすりかり
年一の首をむむま人おりせ寸なりて移の軒を
嵐の發をうりくわしむともや年なり
つるもよ物てむいとちみきつるひはれ
を喧ととり別しは十とをわきり
わすしそくひもねくむら
ふあつらりぬれぬるも 桃李物いそぬ首と
是城こりの思ひ寸今官邸又可北
こくに引換して物愛系や
里もと賢直て屋別の下間と
よの程も 樹の程は我をり
訓こしかこのかもたなり
風も思はしく寔と雪

ふくたアハ早橋色表の笑を
就夢盥漱乃朝と告ぐ
されし一室を心冬
して風とつらに役なり
くれしこよ禊さしこり
かくれんと寸を定又子
さうに其軒よ弘景
背えぬ測り西陽
破啼留もこり
くれのつりもの
こも大根ハ飯
こほほくろ
小川の流るる

驅馳のちいり又月月のふり又月月のふり
こりうつしてこれ又月月のふり又月月のふり
人のいそぐとちいり又月月のふり又月月のふり
ちゆく跡の又月月のふり又月月のふり
とげらふとひ又月月のふり又月月のふり

寛保三年

新酒辭

もくもり季杜う酒瑞もあられとふきの月又月月のふり又月月のふり
ともりなる人ふ又月月のふり又月月のふり
りつてはおのつ又月月のふり又月月のふり
竿をふれく又月月のふり又月月のふり
皆酒身又月月のふり又月月のふり
して罪を又月月のふり又月月のふり

比い多ほ又月月のふり又月月のふり
是ひたり又月月のふり又月月のふり
のあと又月月のふり又月月のふり
くも物を又月月のふり又月月のふり
善の蝶の又月月のふり又月月のふり
てとく又月月のふり又月月のふり
みさ又月月のふり又月月のふり
たとへ又月月のふり又月月のふり
人のり又月月のふり又月月のふり
の尾の山又月月のふり又月月のふり
たや又月月のふり又月月のふり

寛保三年

物志録傳

りまれ又月月のふり又月月のふり

いひなきれくはあきらけいなるたむ
 相見えすはひとハルノチ

定保二秋

蛙歌

引のの 経者の浦のよりのあつたぬは今の存よのこまじく
 ろの佐のささや
 引のの 山々の色し 侍人も報吹とんりまて
 都のあえたるもや
 引のの みる路の橋のたれあつて 幽谷と虹と吐くまじき
 のりや
 引のの 玉川のちろよすつたお人の河よあつて
 こころのせふまことえしこや

引のの 舟倉のお回すつれくを彼列のあつたに
 ろねしつな
 引のの 川のたれよはひし
 をらぬしつたその切のくちあつたや

送其常辞

浮岸乃花のあつたれにちろま紅友の常時
 引のよまきまきれし身は海はるるあつた
 引のよまきまきれし身は海はるるあつた
 うまよまきまきれし身は海はるるあつた
 引のよまきまきれし身は海はるるあつた

甲の といはほまひ物ぞこしし竹

妖物論

世よりけ物といふものありてはほくた女と女唄と然れ
大坊とての五沙法をまげとけりやををんじつハはく
すく守夜斗也るハいかなるゆえをて或人の同くして
例のふたのよりりてつてつては言はく言はく言はく
何たりての名言あるくは獲病ものをおよと取き
獲病ふあま言にして武功の人よはつれをひのり
乃阿やまらをもよもむと最を他母よをいけてつらとせり
うー一執を他父よをいけてく民の是久えをりふ祿よを
獲よとなり執を他母よをいけてくんはを娶わりか
これらやまらハ執程のなすりつては揚子江をハく
ゆはなれともりの正神の穿鑿ハ樂屋のえんており
ろくたたり理屋あをいけて物といふものこころは
ゆー一これ抑神を満ちよもつとをひ佛を祿を

も逢ふとけといけ物ハ百物候ノ感念してけり
すさたけきハ二日圓今年ものせきは訓書圖彙乃
年にも及すとして赤表紙の小豆成のふとつてし
と止マラれんはさふと昔今の義婦國をする男の
んくすく一実守よをいけては核頂よをいけては
はの池の藤屋よをいけては霧ヶ原の蔓草よを
はれて是を赤城の丸桐のえんもよりすれよをいけて
終をりり川幕の陰をもたのますのとは幕も報中
い守つてけすやもはうせんこころいふと
ね〜めてたりれ

寛保二戌八月武州



